

## 秀賞

### 「きっと大丈夫」

山形県天童市立第三中学校

1年 太田 心美

「いっそ話せなくなったら、どれだけ楽だろう」と無意識に思った。私が悩むようになったのは小学3年生の時からだ。

ある日、自分の当番で朝の挨拶をしようとした。しかし、なぜか声が出なかった。みんなからの視線が怖かった。そしてみんなに申し訳なかった。みんなが待っていてくれるのになぜ話せないんだと。パニックになっていた時、先生と一緒に挨拶をしてくれた。

気がつけば日に日に自分が思ったように声が出ず、話しにくくなっていた。みんなは、私の悩みを理解し、「大丈夫だよ」とか「じゃあ僕が言うよ」と言ってくれてとてもうれしかった。でも、罪悪感が消えなかった。「話せたらみんなに迷惑はかけないのに、なんで」とずっと悩んでいた。そうして時が過ぎ、5年生になった。自分の悩みにはもう疲れ果てていた。「また言えなくなるんだろうな」って思うのが日課になっていた。この頃、特に「あ行」がうまく話せなくなっていた。自分でも理解した。

「私はあ行が話せないんだ」と。そこから、国語の音読では自然に自分の番の時は最初にあ行になっているかと探していたり、算数の授業ではこの答えはあ行から始まるから私には無理だと思って言わなかったりしていた。

ある時、学習発表会で劇をすることになった。私はすごく不安だった。「失敗したらみんなに申し訳ない」「止まってたらみんなに迷惑がかかる」「どうしよう」などと思い、不安でしかなかった。「自分の番がくる」「もう逃げたい」と考えていた。そして、とうとう自分の番がきて、案の定言えなかった。「ああ、ほら言えないじゃん」「何なのこの喉意味分からない」と考えながら泣きそうになった。

私は罪悪感と不安と恐怖に襲われて負けたんだ。そして、それから話せないことが多くなった。次の練習では「今日は喉が痛くて話せないんです」と嘘をついてまで話せないことから逃げようとした。誰にも相談できず、相談しようと思っても、みんなに迷惑がかかるし申し訳ないと思って諦めた。しかしその後、私はタブレットに悩みを全て書き、先生に送ってしまった。少し後悔はしたものの、先生から「明日図書室で話そう」と返事が送られてきた。

先生は「話せないことはつらいと思うの。でもみんなも理解してくれているんだから大丈夫。でも無理しないでね」と話してくれて、その言葉で泣いてし

まった。つらいことを理解してくれる友達や先生がいるんだと安心感があったからだ。そこからは、話せなくなってもみんなが理解してくれて前向きになれた。

そして、いよいよ6年生になった。いろいろ不安があったけれど頑張ろうと思ひ、毎日を過ごしていた。運動会で副実行委員長として活動していた。その後気づいたのが「閉会の挨拶をする」ということ。私にとってとても難しい大きな壁だ。「ただでさえ話せないのに人前で話すなんてできるわけない」と思った。でもやるしかないと思ひ、練習を続けた。時には言葉を忘れて、話せなくなったりしたことも何回もあった。でも頑張っ、努力した。そして、とうとう本番。閉会式が始まった。「そろそろだ」と自分でも分かった。「閉会式の挨拶、太田心美さんお願いします」と呼ばれた。台に登り話した。そうすると気づけばもう言い終わっていた。「えっもう話したの?」「できたじゃん自分」と今まで感じたことのない達成感に包まれた。この感動を忘れることは一生ないと思ひ。

春になり私は中学生になった。不安なことはたくさんあった。もちろん話せないことは特に。中学生生活の初日、私には不安なことが一つあった。それは「自己紹介」だった。だから担任の先生に相談した。その時不安に押しつぶされてその場で泣いてしまった。でも「大丈夫だよ」と言ってくれて、その後も友達が来てくれて「大丈夫だよ!」「一緒に頑張ろう」と言ってくれてすごうれしかった。そして自己紹介ができた。

私は、吃音症で毎日つらかったし、今も悩んでいる。しかし、この病気を患っている人は私以外にもたくさんいると思ひ。その一方で世の中には「なんでこの人は話さないの」とか「早く話せよ」と思ひ人もいるかもしれない。でも、その人の気持ちを理解してほしい。思っ、たように話せないことがどれだけ苦しいか。普通に話せることが当たり前ではないことを。

患っている人は、つらいこともあると思ひ。だって思い通りに話せないんだもん。でも、前向きに「私はできる」いや「やってやるんだ」と思ひとうまくいく。うまくいかない日があっ、てもいつかはうまくいく。「大丈夫」この言葉は私のエネルギー。一緒に頑張ろう。